

申候は、血氣の勇は天野被申通りに候。大石などは血氣無之候故、疎忽無分別無之段勿論の事と申候。堀田筑前殿の事被申候。筑前殿、當代などは無之人と被申候。其身、筑前守殿に暫く仕へ居被申候故、能被存候よし。私申候は、世上に稻葉石見守殿を、忠臣と申候は如何と申候へば、大に相違成事のよし。手前堀田の家仕へ申とて、其好む所に阿り申程の心底の者にては無之候。少も取成にては無之候。石見事私怨に極り申候。沙汰の限にくき事と被申候。世上の沙汰と格別の儀に候故、如何と尋候へば、筑前守殿と石見とはいとこに御座候。其時分河村隨軒と申者、大坂にて堀を掘申に付、石見殿を巡見に被遣候。石見殿罷歸言上の趣と、河村より言上の趣と大に相違仕候。河村より申上候趣、一々尤に候由筑前被申候。明後日河村江戸へ參着と申す日、石州、筑前守殿宅へ被參、夜半過まで兩人詮議にて候。新井氏など其夜詰番にて、久敷夜詰いたし、何事に候哉と存候よし。此夜石見殿、達て其身言上の趣に罷成候様に仕度候。無左候ては私一分立かね候よし被申候へ共、筑前殿合點にて無之、最早明後日河村參着候へば事極り候故、

其翌日登城の後、變出來仕候。是に極りたる由に候。筑前殿存生の内は、常憲院様、何にても御氣隨成事は無之候。何も筑前殿死去以後にて候。役者を御取立被成候事など、急度被申上候。筑前殿被居候内は、役者を御近習に被召仕候事無之候。一度御能有之筈に候處、俄に雨天に罷成候故、油障子可申付由、牧野備後守殿被申候。筑前殿被申候は、たとへば公家衆など御馳走の御能にて、一度も二度も延申、以後雨天に候はゞ、油障子など仰付候ても御能有之可然候。是は御慰御能にて候。雨天に候はゞ幾度も御のぼし被成、いつにても晴天の時分、被仰付たるが能候よし達て被申、御能止申候。中々おもねり申事は一度も無之、か様の類毎度の儀に候。然其後には少し驕大に成被申候故、人々にくみ申候。其故稻葉が刺殺すをよき氣味の様に被存候て、石見殿を忠臣など、申憤候。

可觀小説卷二

一、本多上野介殿改易の真相

台徳院様御時、本多上野介殿身上果候事、世上に色々雑説多く、逆心の様に沙汰す。扱々不及是非事也。上野殿は誠の忠臣と云べき人也。父佐渡守は智謀は深き人なれどもいやなる人也。上野は其子にて父には似ぬ人也。權現様最初に、結城の秀康を御立可被成哉、台徳院様を御立可被成やと、老中へ御詮議の時、佐渡守被申候は、一度太閤の御養子に被成、結城の家を御續せ被成事に候へば、是は御詮議に不及候。天下は秀忠公御續被成事、道理の當然と被申候。殘の老中何も此趣に同じ被申候。唯上野介一人被申候は、佐渡守申儀に候得共、私は左様に不存候。如何にしても秀康公、御長子の事に候。唯今迄は太閤に御遠慮にて、態と御疎々敷被遊候へ共、御父子の情に替申事は無之候。然るに長子に御生れ被成ながら、庶子に御成被成事御痛敷事に奉存候。唯秀康を御立被成事、御順道と奉存旨被申候。佐渡守其時せがれ何を存てと被申、叱被申候て、上野介座を立

被申候。其後終に佐渡守料簡に御隨ひ被成候て、秀忠公を御總領に御定め、秀康をば越前へ被封候。台徳院様此事を、事の外御遺恨に被思召候。其後台徳院様御代始に、坂崎出羽守を御成敗被成候時、出羽へ段々被仰旨候へども不致合點、上意にたて合候故、家老へ御内意にて被仰出、出羽を討て出し候へ、左候はゞ出羽守跡をば、御立可被成よし被仰付候はゞ、無爲に濟可申旨詮議之處、上野一人不被致合點候。此詮議聞被申殘の衆へ被申候は、出羽を討て出し候はゞ、慥に跡を御立可被成やと被申候へば、何も老中それにはならぬ事にて候由被申候。上野殿、扱は御たばかり事に候。縦令實に仕候ても、主を討て出せと申御下知が、天下の御仕置に有べき事にてなく候。出羽を御成敗可被成との儀も、上へたて合申故にてなく候や。上へたて合申とて御成敗被仰付候に、其家老に討て出し候へとは、天下の合點いたさぬ事に奉存候。其上御偽事に候へば、彌御仕置に似合ぬ事に存候。何の事もなく私に被仰付候て成共、出羽を踏つぶし申外は無御座候よし被申候。然共台徳院様、終に御内意にて被仰出候。其紙面に老中何も被致判形候。上野介殿